



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究抄録(2022.4)令和2・3年度:

看護計画協働立案に参加した高齢糖尿病患者が自己決定を体験する意味

○金 絵理¹⁾ 大坪 智美²⁾ 服部 ユカリ²⁾

1) 旭川医科大学病院 看護部 2) 旭川医科大学 看護学科

【目的】 高齢糖尿病患者の退院支援や意思決定におけるエンパワーメントに関する示唆を得るため、高齢糖尿病患者が看護計画協働立案に参加し自己決定した体験の意味を明らかにする。

【方法】 研究期間：2018年4月～2020年3月。対象者：B病院に入院し、看護計画協働立案に参加し、65歳以上で質問内容を理解しコミュニケーションが可能である者。データ収集方法：半構成的面接。分析方法：質的統合法（KJ法）による個別分析の後、総合的な分析のため、個別分析の最終ラベルを比較・検討する個別分析比較を行った。

【倫理的配慮】 研究目的、研究参加の任意性、匿名性の保持、利益相反、データの管理の徹底等について説明し、同意書に署名を得た。所属大学の承認を得て実施した(No17216)。

【結果】 研究協力者は男性1名、女性2名の3名で、疾患は1型糖尿病、2型糖尿病、劇症1型糖尿病各1名であった。個別分析比較では、3名の最終ラベル計18枚を共通性に着目しマトリックス上に配置したところ、『病気の深い理解による認識の変化』『主体的な疾患管理の再構築』『信頼する医療者や家族からの支援』『エンドオブライフを自分らしく生きる意欲』の4つの共通項目が見出された。

【考察】 参加者の高齢糖尿病患者に主体的な疾患管理の再構築ができたことは、患者が自分に合った方法を自己決定できるように促す教育的技法（河口,2010）を用いた患者参加型の看護計画協働立案が寄与していたと考えられる。自己決定によって得た成功体験は、エンドオブライフを前向きに生きる意味を探究する自信や気力の回復という生きる意欲になると考える。看護師は、在宅生活での管理を労いながら、意図的に自己決定の機会を設け、患者や家族と協働し、現実的な目標設定と具体的な解決策を考えることが重要である。

【引用文献】 1) 河口てる子(2010)：患者教育の実践研究事例「看護の教育的関わりモデル」,国際ナショナルナーシングレビュー,33(3),116-22.